アンラーニングプロジェクト09

2010. 2. 7

生・労働・運動ネット
富山市神通町3-5-3
TEL 076-441-7843
FAX 076-444-6093

ニューズレター

「報告：模索のための『他山の石』――『民主党総選挙マニフェスト』をあらためてながめる」（09/12/13）での論議から

□マニフェストを「採点する」と「ながめる」との違いは？

昨年夏、私たちの「生の保障」を破壊し続けてきたネオリベを信奉してきた者たちとその政党が政権の座を追われました。そのような大きな転換期を、その後、政権を担うことになった者たちがどのように迎えようとしているのか。そのことを見るための一つの手がかりとして、「ピープルズプラン研究所」のホームページの「論説」中の「シリーズ・民主党マニフェストを採点する」を素材として、09年12月13日（日）、アンラーニング09後半期の第2回として、表記のような学習会を行いました。

「ピープルズプラン研究所」の「民主党マニフェストを採点する」では、「私たちなりの視点から新政権に何を望んでいるのか明らかにしていこう」という趣旨で、「マニフェスト」に掲げられている民主党の政策について、「外交・安全保障／憲法」や「雇用・社会保障」、「教育政策」などといったテーマ別に、「ピープルズプラン研究所」の運営委員や、大学の教員といった人たちが批判・分析を行っています。その中で、製造業への労働者派遣の禁止など、労働の分野では多少は評価できる政策が盛り込まれているとする論者がいる一方で、外交・軍事の分野では、現行憲法下でも国連の「平和維持活動」のために派兵や武器使用が可能だとしている点で大きな問題があると批判する論者もいます。そのように、「マニフェスト」に掲げられている政策について、それぞれの論者が自分なりの関心から重要だと思う箇所を抜き出して批評したり、「そこで書かれている政策自体には異論はないが、それがどこまで予算的な裏付けを伴って実行されるかは疑問だ」といったコメントを付すというのが、その中の論評を全体的に通して見た場合の論調だったように思います。

今回の学習会では、「民主党マニフェストを採点する」のそれぞれの論者ごとの分析がレジメに沿って報告されましたが、その後の「フリートーク」では、「マニフェスト」で掲げられている個々の政策について、これは評価できるとか、あれは問題だとか論じていくという、「マニフェストを採点する」の論評のスタイル自体に対して批判が出されていました。結局、そのように「大真面目」に「マニフェスト」の内容を吟味すること自体が、既成の政治のあり方をどのように組み立てなおすのかという「問い」を不問にして、マニフェストが約束している個別の政策との引き替えで有権者が政党への支持を「バーター」するといったプラグマティックな政治スタイルを肯定することになってしまうのではないでしょうか。また、政治的な問題を論じる人が、ともすれば、自分自身が政権担当者にでもなったかのような口ぶりで、「上から目線」で政治を論じることになってしまうということが珍しくはありませんが、そうした傾向をそれぞれの論者たちも完全には免れていないように思います

「マニフェスト」中の政策相互の不整合・ちぐはぐぶりや、そこにある個別の政策が反貧困の運動などで主張されていることの盗用・「つまみぐい」に過ぎないのではないかということが、今回の「フリート

ーク」の中でも指摘されていました。それを受けて、前の政権が社会保障・福祉を破壊してきたことが、ある種の限界に達してしまったという、いわば、「敵失」から現在の政権が成立しただけのことであり、前政権による「生の保障」の破壊に対する部分的な「手直し」や取り繕いということはあっても、そこに明確な社会ビジョンなどは無いことは明らかだという発言がありました。

また、今回の「フリートーク」では、「民主党マニフェストを採点する」のような細かな分析ではなく、「マニフェスト」をさっと一瞥してその無内容ぶりを見て取ればいいのであって、結局、前政権の「敵失」によって政権の座に就いただけに過ぎないことがそこにも明らかに反映されていると言い切ることが、それを「採点する」のではなく、「ながめる」ということではないか、という意見も出されていました。

□体制への取り込みを「打破する」だけの運動の展開を！

今回の「フリートーク」では、「民主党のもつ保守的な体質は自分もよく承知しているが、それでも『政権交代』が実現したことは、自分にとって喜ばしいことであり、これからの運動にとってのある種のチャンスではないのか」と、発言した参加者がいました。その一方では、「この間の反貧困運動の中で主張されてきたことが、トゲを抜かれた形で『マニフェスト』に盛り込まれたり、反貧困運動の象徴的な存在だった湯浅誠が現政権の国家戦略局の外部スタッフになったりしたことは、結局、『左』が『右』に取り込まれたということではないか」と言う参加者もいました。

それらの意見に対して、「社会の荒廃がこれ以上進行して、必要最低限の労働力の再生産さえおぼつかなくなれば企業活動自体が成り立たないという危機感の下で、日本資本主義の『延命』のために生み出されたのが現政権ではないか」という発言がありました。そう考えるのであれば、運動が体制に取り込まれたかどうかの論議の前に、国家や資本が自らの「延命」のために都合良く利用することが不可能になるほどの「成果」を運動の側がどのように創り出していくのかということこそが、重要なはずです。都市暴動が相次いだ19世紀のフランスでは、定職をもたずに半端仕事や雑業で暮らしを立てる貧民層が「危険な階級」と呼ばれていたそうですが、この国で大きな「生の困難」を強いられる私たちが、「悲鳴」をあげ始めた日本資本主義を更にゆるがすだけの「危険な階級」たりえるかが、改めて問われているように思います。

沖縄の普天間基地の移設問題は、今回の「フリートーク」の中でも中心的な話題となっていましたが、前政権が日本本土の「平和と繁栄」のために、沖縄の人々の意志に反して米軍基地を押しつけ続けてきたことの矛盾は、もはや、「発火点」に近いところにまで高まりつつあるように思います。かって、沖縄の日本国家への「復帰」の前後に、「反復帰論」や「沖縄自立論」が盛んに論議された時期がありました。そのように、まさに、「軍事基地を勝手に押しつけるような国家に、自分たちはもはや所属したくはない」と、沖縄の人たちが言いかねないようなところにまで状況が進んでいるのではないか、という意見が「フリートーク」の中で出されていました。そういった沖縄での米軍基地をめぐる状況に現れているような、この国をゆるがしかねないほどの社会的な矛盾・「亀裂」が現在、どこに凝縮された形で出現しているのか、また、そうした支配体制が生み出す矛盾の押しつけに対抗して闘う現地の人たちを孤立させないためにも、私たちに何ができるのか。そうしたことに思いをめぐらすための、運動的な「想像力」といったものが、今、私たちに強く求められているように思います。

新たに政権の座についた者たちが、運動側が要求してきたことを「盗用」して、社会保障・福祉の充実や労働者の保護を唱えるようになっています。そのことを体制のとりあえずの「安定」の枠内にとどめさせないためにも、表面的には自分たちと同じ言葉で語る現政権に対して、自分たちはどのように批判的・対抗的に向き合うのかを迫られるという、これまでにない状況が生じているように思います。そうした状況であればなおさら、先ほど言ったような意味での運動的な「想像力」が今まで以上に求められているということを、今回の学習会では、「マニフェスト」をめぐる論評を「他山の石」にして、改めて確認することができたように感じています。